

～未来に向けて住みやすい町を考える上での3つの視点～

1. 人口の視点

- ・現在は生産年齢人口と高齢者人口、（働いている人とそうでない人）が均衡しており、経済成長率はマイナスになってもおかしくないがプラスとなっている。これはまだポテンシャルがあるということ。
- ・各自治体が移住者の増や若者の活躍などを提唱しているが机上の空論であり、余市町も含めて待ち受けているのはシビアな人口減少。
- ・皆さんと考えたいのは、人口減少は打破できるものではないが、これを前提として地方の所得を上げる、まちを安定的に維持する方策。

2. 財政に関する視点

- ・高齢人口の増加、生産年齢人口の減少により税収の減少が起こる。するとまちづくりの運営資金が無くなり厳しい財務状況に置かれる。
- ・これまで地方自治体は、国が作った計画や方針を正確に執行することが主な仕事だった。
- ・しかし、コロナワクチン接種では方針の執行だけをやってきた自治体と、自ら方針を立てて進めている自治体で大きな差が出ているように、地方自治体がきちんと将来に向かった方針を立てていく必要がある。
- ・これまで国は地方交付税を配分していれば地方を回せたが、今後はそれが立ち行かなくなるので、地方は自ら財務状況の改善に向けた手法をとり、使える財源を集めなければならない。
- ・余市町の財務はほとんどが依存財源（地方交付税）によって賄われているが、既存事業を国の補助メニューに変え、ふるさと納税を5千万から4億に伸ばすなど、私から打ち出した方針に対し、スタッフが頑張って自ら使える財源の確保に努めている。
- ・道の駅、プール、老朽化する公共施設の統廃合といった、今後お金がかかる案件に優先的に配分していかなければならない。

3. 若者の政治参加についての視点

- ・様々な自治体の長がシルバーデモクラシーからの脱却を課題としている。余市町も若者、高齢者、様々な世代の意見が反映されるまちづくり、社会づくりをしなければならない。
- ・私は特に今後のまちを担う子供について重視しており、余市町だけでなく日本全体を考えてもそうすべきと思っているが、その意見が反映されるスタイルになっていないので、若者の政治参加について皆さんに考えていただきたい。

○余市町の可能性

1. 生き残る地方とは

- ・地方が生き残る要因は、大都市に隣接しているか、リゾート地であるかの2つ。
- ・余市町は札幌市という大都市に隣接しているほか、高速道路が延伸すればリゾート地にも隣接する恵まれた立地となり、これは最大の強みと考えられる。

2. 町民の所得向上

- ・余市町が注目を浴びているワインの例では、フランスの人口360人ほどのロマネ村、同じくフランスのシャンパーニュ地方の人口数千程の村々が、ワインで世界の富を集め、町を安定的に維持している。
- ・余市町も世界的なマーケットを持つワインを活用し、富を増やすことで町を維持することが考えられる。

3. 何を特化させるか

- ・人口減少していく中で、総花的に予算をつけることは地域を強くすることに繋がらないので、余市町においても何に特化していくべきか精査しなければならない。
- ・長野県では、他業種からの批判を恐れず、リーダーがワインに特化するメリットがあると覚悟を持った判断で、長野ワインバレー構想を推進している。
- ・このようにメリットがあれば特定の産業に特化していく視点も必要と考えられる。